

解答

□

問一 a 用途 b 胴体 c 朗読 d とも〔す〕

問二

A イ B ア C エ D ウ

問三

ウ マッチ箱の象の絵

問四

エ

問五

ウ

問六

ア

問七

ア

問八

いくら子供を乗せてもシーソーが動く気配を見せないことに対しての、象のあせりやいらだち、その場の緊張。

問九

マッチを擦って誰よりも上手に綺麗な火を点すこと。

□

問一

a くがまえ・七 b やまいだれ・十 c てへん・十六

問二

全く「断念」しないでいられる人生などないのに、「断念」に伴う悩みや葛藤を受け入れられないから。

問三

弱者への思いやりや共感
着実な努力をする態度

問四

ア

問五

断念させるべきことは、断念させること

問六

子どもを無条件に愛してあげること（子どもを全体対象として認識すること）

問七

イ

問八

子どものときに失敗を克服し、乗り越えていく体験を積み重ねておかないと、その後に学ぶのは難しいから。

問九

自立

解説

□ 出典は、小川洋子「ミーナの行進」。

問一

「用途」「点す」などといった、中学入試用問題集では網羅しきれない出題が例年見られます。普段から新聞を読

問二

むなどして、語彙を豊かにしておきたいところです。

問三

A 直後に「高級な外国製品が入っていたに違いない」とあります。こうした推量表現には「さぞかし」をつけ

問四

ます。B 直後の「子供が喜びそうな」を強調する、「いかにも」という、まさにそのとおりだという意味表す言

問五

葉が入ります。C 直前に「草原の子供たちは皆優しかったので」とあるので、「すぐさま」「承知してくれまし

問六

た」という文脈にするのが適切です。D 前後に注目しましょう。「次々と子供たちはシーソーに乗せられていき

問七

ました」という内容を受け、「彼らは不安になってきました」とあるので、時間経過とともに少しずつ変化、進行す

問八

るさまを表す「しだいに」が適切です。

問九

ベッドの下に隠されていた“マッチ箱の箱”は、ミーナにとっては大切な秘密です。その大切な秘密を「私」が

問一〇

見て、つまらないなどと言ったらどうしよう。そうした不安から、ためらいがちに「もしよかったら、だけど」な

問一一

どと言っているのです。

問一二

傍線⑥の直後に「ミーナが愛したのはマッチ箱に描かれた絵だった」とあるので、ミーナが見て欲しかったもの

問一三

は「マッチ箱の絵」だと分かります。そこには象の絵が描かれていましたから、そのことも答えに盛り込みましょ

問一四

う。

問一五

直後の段落で「昆虫採集の標本」を取り上げ、「マッチ箱もそんな昆虫たちのように見えた」としていますから、

問一六

ここでの「静かな空気」は「標本」と「マッチ箱」に共通する空気ではなくてはいけません。両者ともに、「見られ

問一七

る」ことを待ってそこに存在しているものですから、エが適切です。

問一八

とてつもなく重い象がシーソーの片側に乗っているので、子供が懸命にお尻を踏ん張ってみてほしいして効果が

問一九

なかったのです。努力や援助が少なくて何の役にも立たないことをたとえる「焼け石に水」が適切です。

問二〇

直前に「象は悲しみました。自分が乗った途端、凍りついたようにぴくりとも動かなくなってしまうたのですか

問二一

ら、原因は自分以外にない」と悟りました」とありますから、自分の重さのせいで楽しいシーソー遊びができず、象

問二二

は情けない気持ちでいっぱいだったのだとわかります。

問二三

象は何とかシーソー遊びがしたくて、次々と子供たちをシーソーに乗せていきます。しかし乗せても乗せてもシ

問二四

ーソーは動く気配を見せず、なおムキになって象は子供たちをシーソーに乗せつけます。そうした象の焦る気持

ちやいらだつ気持ち「牙が上を向き」という表現に表れています。そして、ムキになる象のいらだつ雰囲気不安を覚え始めた子供たちの気持ちや、その場のただならぬ緊張感が「(牙が) きりつと光りました」という表現に表れています。

問九 ミーナは「夢中になってマッチ箱を集め」ますが、それは、「マッチ箱に描かれた絵」に素敵な物語を見出すことが楽しかったからであり、「火を点すのが好きだったからではな」かったのです。ですから、ミーナが「誰よりも上手に綺麗な火を点せる」のは、結果としてそうだったに過ぎず、マッチを擦って上手に火を点すことが、マッチ箱収集の目的ではなかったということです。

〔二〕 出典は、片田珠美「十億総ガキ社会 『成熟拒否』という病」。

問一 部首や画数の問題は、この学校では過去にも何回か見られています。しっかり対策しておきましょう。

問二 傍線①のすぐ前の「それに伴う悩みや葛藤を自分で引き受けられない」と傍線①は原因と結果の関係にありますから、「断念に伴う悩みや葛藤を受け入れられないから」が答えの核となります。ただしこれだけでは、なぜ「自分だけ」という「被害者意識」につながるかに答えていませんし、「本文全体を踏まえて」という設問条件も満たしていません。自分だけひどい目に遭っていると思うのは、断念し、そこからはい上がるという経験を子供の頃から積み上げていないことが原因です。そのことについては本文後半で主に述べられています。断念した経験のない者は、そうした断念などめずらしいことではなく、誰でも経験することだということが分かりません。だから、断念せざるをえなくなったとき、なぜ自分だけ辛い目に遭わなくてはいけないかと被害者意識を持ち、その理不尽さを他人にぶつけたくなってしまうのです。

問三 空欄Aのすぐ前に注目しましょう。「敗者への思いやりや弱者への共感を持てるようになる。また、…着実な努力」というものもできるように「ありますから、ここで答えるべきなのは「敗者への思いやりや弱者への共感」と「着実な努力」だと分かります。後は、字数制限に合わすことと、答え方に注意してください。まず「敗者への思いやりや弱者への共感」は字数オーバーです。「敗者」と「弱者」は、「弱者」の方が上位表現ですから、「弱者への思いやりや共感」とまとめましょう。また「着実な努力」の方は、何が身につきますかという問いに対する答え方としては不適切なので、「着実な努力をする態度」「着実な努力をする姿勢」などと答えましょう。

問四 断念する経験を積み重ねると、物事は何でも自分の思い通りになるというわけではないということが分かってきます。つまり「だめなものだめ」という、ものの道理を学んでいくのです。

問五 直前の二つの段落に着目しましょう。親は子供に「断念させるべきことは断念させること」と、そしてその前提条件として「子どもを無条件に愛してあげること」と、といった二つの事柄が提案されています。この二つが、今や逆転してしまい、子供を「断念させない一方で、…条件付きの愛しか抱けな」くなっている親が多くなっているのです。

問六 「B 対象」という表現は、直前の段落の「子供を全体対象として認識すること…」という内容を受けたものです。「全体」の対義語である「部分」を入れましょう。

問七 親が過保護・過干渉だと、子供は「転んで起き上がる経験を積み重ねる」ことができず、したがって「失敗したとき、どうやって克服し、乗り越えていけばいいのかを、身をもって体験すること」もできません。そうして大人になつたらどうなるでしょう。傍線④の後を読むと、失敗の経験は「早いほうがいい」と書かれています。「やり直しがきくから」です。ということはつまり、やり直しがきかない大人になってしまつてから失敗を繰り返しても、それはマイナスばかりで、人としての成長にはつながらず、そのまま「年だけ取」っていくこととなるのです。

問八 「反抗期」は、自らの欲望を持ち、それを押し通そうとする思いが強くなったときに起こるようです。親の言いなりにならず、親から「自立」しようという思いの表れと見ることもできます。したがって、「反抗期のない子ども」は、親の言いなりとなる、「自立」心の乏しい子供ということができます。